「ジベレリン水溶剤〕

農林水産省登録 第24247号

性 状:★1 盡 性:普通物

住友ジベレリン粉末

危険物:一 有効年限:5 年

装:[1号包装] 1包(ジベレリン50 mg×4包)×10×10 包

[3号包装] 1包(ジベレリン200 mg×1包)×10×10

有効成分: ジベレリン……3.1%

★1:白色の顆粒状末で水に投入すると容易に溶け透明な溶液となる。

サイトに掲載されている本剤の最新情報がご覧になれます。

農薬ガイドの適用表内(*)および各項目については、i-農力サイ トの「製品情報」や「農薬ガイドを見る」から、「農薬ガイドの見方」 をご参照ください。 本剤の最新情報:こちらの2次元バーコードを読み取ると i-農力

[適用と使用法]

ジベレリン 本剤の を含む 作物名 使用目的 使用濃度 使用液量 使用時期 使用方法 農薬の 使用冋数 総使用回数 ぶ ど う (ヒムロッド 第1回目 満開予定日 2回、但し 第1回目: 2回、但し ジベレリン 果房散布 約14日前 無種子化 降雨等により 花房浸漬 降雨等により シードレスを 100 ppm の場合は (第1回目) 果粒肥大 再処理を行う 再処理を行う 第2回目: 除く2倍体米 30~100 第2回目 及び 促進 場合は合計 果房浸漬 場合は合計 国系品種) ℓ /10 a ジベレリン 満開約10日後 4回以内 又は果房散布 4回以内 75~100 ppm [無核栽培] (第2回目) 1回、但し 1回、但し ぶ ど う (ヒムロッド 降雨等により 降雨等により 果粒肥大 ジベレリン 着粒後 果房浸渍 再処理を行う 再処理を行う 促進 100 ppm シードレス) 場合は合計 場合は合計 2回以内 2回以内 花房浸漬 、 (大粒系デラ ウ ェ ア) ジベレリン 展葉 (ホルクロルフェ 1回 1回 7~8枚時 200 ppm ニュロン5~ 「無核栽培〕 10 ppm 液に加用) 満開予定日 第1回目: 約14日前 花房浸漬 (第1回目) 第2回目: 及び 果房浸渍 無種子化 満開約10日後 第1回目 果粒肥大 又は果房散布 2回、但し 2回、但し (第2回目) ジベレリン 果房散布 促進 降雨等により 降雨等により 100 ppm の場合は (デラウェア) 第1回日: 再処理を行う 再処理を行う 第2回目 30~100 満開予定日 花房浸漬 [無核栽培] 場合は合計 場合は合計 ジベレリン ℓ /10 a 18~14 日前 (ホルクロルフェ 4回以内 4回以内 75~100 ppm (第1回目) ニュロン1~5 ppm 液に加用) 及び 満開約10日後 第2回目: (第2回目) 果房浸漬 又は果房散布 う 1回. 但L (キャンベルアー 降雨等により 1回、但し リーを除く2倍 再処理を行う 降雨等により 体米国系品種) ジベレリン 満開 果粒肥大 場合は合計 再処理を行う 果房浸渍 [有核栽培] 促進 50 ppm 10~15 日後 2 回以内 場合は合計 2回以内 2回以内、 ぶ ど う (キャンベル 但し降雨等に より再処理を - リ <u>- 〕</u> 満開予定日 行う場合は 果房伸長 ジベレリン 30~100 [有核栽培] 約 20~30 日前 花房散布 1回 3 ~ 5 ppm ℓ /10 a 合計3回以内 促進 (展葉3~5枚時)

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン を含薬の 農薬用回数	
ぶどう	無種子化大	第 1 回目 ジベレリン 25 ppm 第 2 回目 ジベレリン 25 ppm	_	満開時~ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10~15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	3回以内、 ・但し降雨等に	
(2倍体欧州 系品種) [無核栽培]	促進	ジベレリン 25 ppm		満開 3~5日後 (落花期)	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェ ニュロン 10 ppm 液に加用)	より再処理を	
	果房伸長 促進	ジベレリン 3~5 ppm		展葉 3~5枚時	1 🗇	花房散布		
ぶ ど う (ヒロハンブル グを除く2倍 体欧州系品種) [有核栽培]	果粒肥大	ジベレリン 25 ppm	ı	満開 10~20 日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う	果房浸漬	1回、但し 降雨等により 再処理を行う	
ぶ ど う (ヒロハンブルグ) [有核栽培]	·促進	ジベレリン 50~100 ppm	果房散布 の場合は 70~80 ℓ/10 a	満開 10~15 日後	場合は合計 2回以内	果房浸漬 又は 果房散布	場合は合計 2回以内	
ぶ ど う (キングデラ、 ハニーシード レス、BKシー ドレスを除く	着粒安定 果粒肥大 促進	第1回目 ジベレリン 25~50 ppm 第2回目 ジベレリン 25~50 ppm	-	満開時~ 満開3日程) (第1回目) 及び満開 10~15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等に より再処理を 行う場合は	
3倍体品種)	果房伸長 促進	ジベレリン 3~5 ppm	30 ~ 100 ℓ/10 a	展葉 3~5枚時	1 回	花房散布	合計5回以内	
ぶ ど う (BK シードレス)		第 1 回目 ジベレリン 25~50 ppm 第 2 回目 ジベレリン 25~50 ppm	_	満開3日目) (第1回目) 及び満開 10~15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	2回以内、 但し降雨等に より再処理を	
	着粒安定 ·果粒肥大	ジベレリン 100 ppm		満開 3~6日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房又は 果房浸漬	行う場合は 合計4回以内	
ぶ ど う (キングデラ)	操和肥大 促進 	第 1 回目 ジベレリン 50 ppm 第 2 回目 ジベレリン 50~100 ppm	果房散布 の場合は 50~100 ℓ/10 a	満開時~ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10~15日後 (第2回目)	2回	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬 又は果房散布	2回	
ぶ ど う (ハニーシー ド レ ス)		ジベレリン 100 ppm	_	満開 3~6日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房又は 果房浸漬	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン を含薬の 農 機使用回数
	無種子化大	第1回目 ジベレリン 12.5~25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm		満開時~ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10~15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	
ぶ ど う (サニト ジュを除く日種) 系 4 倍 核 栽 培]	促進	ジベレリン 25 ppm	_	満開3~5日後 (落花期)	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェ ニュロン 10 ppm 液に加用)	
	無種子化	ジベレリン 12.5~25 ppm		満開時~ 満開3日後		花房浸漬 (満開10~15日後 にホルクロルフェ ニュロンによる果 粒肥大促進処理を 行うこと)	
	果房伸長 促進	ジベレリン 3~5 ppm	30~100 ℓ/10 a	展葉3~5 枚時	1 回	花房散布	
	無種子化果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 12.5~25 ppm 第2回目ジ ベレリン 25 ppm		満開時~ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10~15日後 (第2回目)	2回、但しり 降悪処理を合計 4回以内 1両 1両等により	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等に より再処理を 行う場合は 合計5回以内
		ジベレリン 25 ppm	_	満開 3~5日後 (落花期)		花房浸漬 (ホルクロルフェ ニュロン 10 ppm 液に加用)	
ぶ ど う (サニールージュ) [無核栽培]	無種子化	ジベレリン 12.5~25 ppm		満開時~ 満開3日後	再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房浸漬 (満開10~15日後 にホルクロルフェ ニュロンによる果 粒肥大促進処理を 行うこと)	
	果房伸長 促進	ジベレリン 3~5 ppm	30 ~ 100 ℓ/10 a	展葉 3~5枚時	1回	花房散布	
	着粒密度 低減 果粒肥大 促進	第 1 回目 ジベレリン 25 ppm 第 2 回目 ジベレリン 25 ppm		満開予定日 14~20 日前 (第 1 回目) 及び満開 10~15 日後 (第 2 回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 (ホルクロル フェニュロン 3ppm液に加用) 第2回目: 果房浸漬	
ぶ ど う (巨峰、ルビー ロマン、ハニー ビーナス) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	_	満開 10~20 日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計	果房浸漬	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計
ぶ ど う (高尾、ふく し ず く)		ジベレリン 50~100 ppm		満開時~ 満開7日後	2回以内	花房又は 果房浸漬	2回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン を含む 農薬の 総使用回数	
ぶ ど う (あづましずく)	果粒肥大 促進	第1回目 ジベン50 ppm 第25~50 ppm 第2回目 ジベレリン 50 ppm	l	満開時 (第1回目) 満開4~13日後 (第2回目)	2回以内、 但し降雨等に より再処理を 行う場合は 合計4回以内	果房浸漬	2回以内、 但し降雨等に より再処理を 行う場合は 合計4回以内	
かんきつ(苗木、ただし、温州み		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	12~3月		立木全面散布 又は枝別散布		
かんを除く) かんきつ (不知火、ぽんか	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200 ~ 700 ℓ/10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ~80倍液に加用)		
│ ん、かぼす、はる ○ み、ワシントン ○ ネーブル、日向夏、			50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	1 🗓	
すだち、 エキチン では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~100 ℓ /10 a	開花始め〜 満開 10 日後		散布		
不知火	花芽抑制による維持勢の維持落果防止	ジベレリン 2.5 ppm	200 ~ 700 ℓ/10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ~80倍液に加用)		
は 愛媛果試第28号 愛媛果試第48号		ジベレリン	50 ~ 250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	3回以内	
愛媛果試第 48 号 清 見		25~50 ppm	50 ~ 100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開 10 日後		散布		
	水腐れ軽 減	ジベレリン 0.5~1ppm	50∼500 ℓ /10 a	着色終期 但し、収穫 7日前まで	1 🗓	果実散布		
	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200∼700 ℓ /10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ~80倍液に加用)		
カ <mark>カ</mark>	労の維持	ジベレリン	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	25∼50 ppm	50 ~ 100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開 10 日後		散布		
	水腐れ軽 減	ジベレリン 0.5~1ppm	50 ~ 500 ℓ/10 a	着色終期 但し、収穫 7日前まで		果実散布		
	花芽抑制による樹魚の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200∼700 ℓ /10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ~80倍液に加用)	1 🛽	
ぽんかん	勢の維持	ジベレリン	50∼250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
16 70 13. 70	落果防止	25∼50 ppm	50∼100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開 10 日後		散布		
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5 ppm	50∼500 ℓ/10 a	着色始期~ 4分着色期 但し、収穫 21日前まで		果実散布		

色掛けは2024年7月24日適用拡大

11-31-5	# F 5 ''	/ -	# m \(\tau \)	/+ m -+ +-	本剤の	# m -t -vt	ジベレリン を含む	
作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	使用回数	使用方法	農薬の 総使用回数	
	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50 ~ 250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
 長門ユズキチ (無 核)	落果防止		50~100	開花始め~ 満開 10 日後		散布		
12/	着果安定	ジベレリン 50 ppm	ℓ/10 a	開花期~ 開花終期		花又は 果実散布		
	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10~25 ppm	50 ~ 400 ℓ/10 a	収穫予定 14~30 日前		果実散布		
すだち	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50 ~ 250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
すだち	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50∼100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開 10 日後		散布		
9 /2 5	果皮の 緑色維持	ジベレリン 5~25 ppm	50~400 ℓ /10 a	収穫予定 7~30日前		果実散布		
	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン	50∼250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
平兵衛酢かぼす	落果防止	25∼50 ppm	50∼100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開 10 日後	1 🛭	散布		
	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10~25 ppm	50~400 ℓ /10 a	収穫予定 14~30 日前		果実散布		
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200∼700 ℓ/10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ~80倍液に加用)	1回	
ワシントンネ ー ブ ル		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後			立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 500 ppm	30~40 ℓ /10 a	満開 10~20 日後 の幼果期		幼果に散布		
	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200∼700 ℓ /10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60 ~80 倍液に加用)		
日向夏		ジベレリン 25~50 ppm		収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布		
	無種子化 落果防止	ジベレリン 300~500 ppm	30 ~ 40 ℓ/10 a	満開 7~10 日後		果実散布		
		ジベレリン 25~50 ppm				立木全面散布又は枝別散布		
温州みかん (苗 木)	, 花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 10 ppm	50~250 ℓ/10 a	11~1 月		立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000~2000 倍 液に加用)		
		ジベレリン 2.5 ppm	200∼700 ℓ /10 a			立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60 ~80 倍液又は 展着剤に加用)		

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン で含薬の 農 機使用回数	
		ジベレリン 25~50 ppm				立木全面散布 又は枝別散布		
温州みかん	花芽抑制 による樹 勢の維持	ジベレリン 10 ppm	50 ~ 250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000~2000 倍 液に加用)		
		ジベレリン 2.5 ppm	200∼700 ℓ/10 a	11~1月 但し、収穫後		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60 ~80 倍液又は 展着剤に加用)	3回以内	
	落果防止	ジベレリン 10 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め〜 満開 10 日後		散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000~2000 倍 液に加用)		
温州みかん		ジベレリン 25~50 ppm			1回	散布		
	浮皮軽減	ジベレリン 1~5ppm	100~400 ℓ /10 a	収穫予定日 の3カ月前 但し、収穫 45日前まで		果実散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000~2000 倍液に加用)		
	花芽抑制による樹	こよる樹 ニュート		収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60 ~80 倍液に加用)		
きんかん	勢の維持	勢の維持	ジベレリン	50~250	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	1 回
	落果防止	25~50 ppm	ℓ /10 a	開花始め~ 満開 10 日後		散布		
	着果安定	ジベレリン 300 ppm	30 ~ 60 ℓ /10 a	一番花開花期		花に散布		
び わ (3 倍 体)	着果安定	第 1 回目 ジベレリン 200 ppm	-	満開予定日 約7日前~ 満開時 (第1回目)		ホルクロルフェ ニュロン 20 ppm 液に加用 第 1 回目: 花房浸漬 第 2 回目 果房浸漬		
び わ (麗 月)	促進	第2回目 ジベレリン 200 ppm	25~40 ℓ/10 a	及び第1回 目処理後 35~60日 (第2回目)	2回	ホルクロルフェ ニュロン 20 ppm 液に加用 第 1 回目: 花房散布 第 2 回目: 果房散布	2回	
す も も (貴 陽)	着果安定	ジベレリン 100~200 ppm	20 ~ 50 ℓ /10 a	満開 20~ 30 日後 (第 1 回目) 満開 50~ 60 日後 (第 2 回目)		果実散布		

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン を含む 農薬の
					使用四数		総使用回数
かき	落果防止	ジベレリン 12.5~200 ppm	30 ~ 100 ℓ/10 a	満開 10 日後	1 回	幼果及び へたに散布	1 回
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25 ppm	100 ~ 400 ℓ /10 a	開花期	1 花当り 1 回	花に散布	1花そう当り 3回以内
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50~200 ppm	_	は種前	1 回	種子浸漬	1 回
み つ ば (軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10 ppm	50~100 ℓ /10 a	本葉2~3枚時 (第1回目) その2回目 (第2回目) 但し、収ま 14日前まで	2回	葉面散布	3回以内 (種子への処 理は1回以 内、は種後 は2回以内)
み つ ば (軟化栽培)		ジベレリン 20~50 ppm	€/10 a	根株伏込時	1回	根株上面に 散布	2回以内 (種子への処理 は1回以内、 根株伏込時は 1回以内)
トマト	空どう果 防止	ジベレリン 10 ppm	1花房当り 5mℓ		1花房当り 1回	花房散布 (トマト落果防 止剤と併用)	種子への処 理は1回、 1花房当り 1回
なす	着果数增 加	ジベレリン 10~50 ppm	100∼150 ℓ/10 a	開花時	1回	葉面散布	2回以内 (種子への処 理は1回以 内、は種後 は1回以内)
さやいんげん (矮性(促成又 は半促成栽培))	節間伸長 促進	ジベレリン	1株当り 2mℓ	本葉 0.5~1.5枚 展開時		茎頂部散布	3回以内 (種子への処
し そ (花 穂)	穂の伸長 促進 花径の伸 長促進	5 ppm	50 ℓ /10 a	出穂期 但し、収穫 5日前まで	2回以内	茎葉散布	理は1回以 内、は種後 は2回以内)
い ち ご (促成栽培)	着果数增加 熟期促進	ジベレリン	1株当り	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	1 株当り 6 回以内	茎葉全面散布	1 株当り
いちご	果柄の 伸長促進	10 ppm	5 mℓ	頂花の出蕾 直後~ 開花直前	1 花房当り 1 回	株の中心部 に散布	10 回以内
い ち ご (親 株 床)	ランナー発生促進	ジベレリン 50 ppm	1株当り 10㎡	採苗時 ランナー 発生直前~ 発生初期	1株当り 1回	茎葉散布	1株当り 1回
メロン	着果促進	ジベレリン 200 ppm	1花当り 2~5㎡	開花前日~ 翌日	1 花当り 1 回	散布 (4-CPA 剤 50 倍液に加用)	種子への処 理は1回、 1花当り1回
ے ام	休眠打破	ジベレリン 50 ppm	1株当り 20~25 mℓ			根株散布	
う ど (春 う ど)	による生 育促進	ジベレリン 50~100 ppm	_	伏込時	1 回	根株浸漬	1 回
た ら の き (促成栽培)	萌芽促進	ジベレリン 50 ppm	100~200 mℓ/m²			駒木散布	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン を含 農 農 総使用回数																
ふき	生育促進	ジベレリン 25 ppm	50 ~ 300 ℓ/10 a	葉数3~4枚時 (草丈10~ 30 cm 頃)		全面散布	1 🛭																
セルリー	生育促進 肥大促進	ジベレリン 50~100 ppm	20 ~ 200 ℓ/10 a	収穫予定 7~20日前	1 回	葉面散布	2回以内 (種子への処 理は1回以 内、は種後 は1回以内)																
畑わさび	花茎の抽 出時期促 進及び発 生量増加	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 100 ppm	1株当り 2mℓ	花芽分化後の10 月下旬(第1回 日処理後の11月 後の11月上旬し 2回目) 但し第 2度60日前まで	2 回	株の中心部 に散布	3回以内 (種子への処 理は1回以 内、は種後 は2回以内)																
	休眠打破による萌		-			30 秒間 種いも浸漬																	
ばれいしょ	提びも全地の 選がまれた は がまれた は が は が は が は が は が は が は が は り は り は り	ジベレリン 5~10 ppm	250~300 ml / 種いも 10 kg	植付前		種いも散布	1回																
花 き 類(りんどうを除く)	発芽促進	ジベレリン 50~200 ppm	_	は種前		種子浸漬																	
りんどう			ジベレリン	50~150 ℓ/10 a	定植直前 または定植 1~5週間後		茎葉散布	2回以内 (種子への処 理は1回以 内、は種後															
									100 ppm	1株当り 5~10㎡	収穫後		切株散布	は1回以内)									
<mark>л 5 –</mark>		ジベレリン	_	植付時	1 回	球根浸漬	OBNA																
(湿地栽培を除く)	生育促進	50 ppm	50∼150 ℓ/10 a	花茎伸長期			2回以内																
トルコギキョウ				-	-			Ŀ	Į!	Į!	Ŀ				5	اِ	5	ジベレリン 50~100 ppm	30~40 ℓ /10 a	生育期間中 にロゼット 化した時	茎葉散石		
ソリダゴ						ジベレリン 25 ppm	1株当り 1㎡	活着直後 又は萌芽期															
アイリス		ジベレリン 50~100 ppm	_	植付時		球根浸漬	1回																
シクラメン		ジベレリン 1~5ppm	1 株当り	9月中・下旬		花蕾を含む芽の 中心部に散布																	
プリムラ (マラコイデス)	開花促進	ジベレリン 10~20 ppm	2 ~ 5 mℓ	11 月上旬頃の 花蕾出現直後		株の中心部 に散布																	
スパティフィラム	ジベレリン 30~40 出荷予定期		出荷予定期の 2~3カ月前		茎葉散布																		
みやこわすれ	開花促進 草丈伸長	ジベレリン 50~100 ppm	1株当り 10~15㎡	1月中旬の保 温開始時から 7~10日間隔	3 🗓	葉面散布	3回以内																
ㅎ 〈	促進	ジベレリン 25~100 ppm	50~100 ℓ/10 a	生育期	2回以内	茎葉散布	2回以内																

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ジベレリン を含 農薬の 総使用回数	
しらん	開花促進 草丈伸長 促進	ジベレリン 50 ppm	1	植付時 30 分間株浸漬				
てっぽうゆり (促成栽培)	休眠打破	ジベレリン 1000 ppm		低温処理前	1 回	30 秒間 球根浸漬	1 回	
アザレア	開花促進	ジベレリン 250~500 ppm	30 ~ 40 ℓ /10 a	開花予定日 約1カ月前		茎葉散布		
さ つ き (施設栽培苗)	茎の伸長 促進 花芽分化 の抑制	ジベレリン 100~200 ppm	50 ~ 100 ℓ /10 a	茎の伸長初期 〜伸長終期 (開花盛期以降) 1〜2週間間隔	3 🗓	頂芽に十分 散布	3回以内	
さくら	休眠打破による生	ジベレリン	50 ~ 200 ℓ/10 a	休眠期	1 回	切り枝 全面散布	1 回	
(切り枝促成栽培) 	育促進	25∼50 ppm	_	11.200		切り枝浸漬		
す ぎ (採 種 樹)		ジベレリン 100 ppm	1 樹当り 300~ 400 ml	6~8月頃の 花芽分化期	3回以内	葉面散布	3回以内	
(1木 1里 1団)	花芽分化 促進	胸高径5cmの樹 1本当り100mg	_	7月上中旬の 花芽分化期	1 回	樹幹基部 剥皮挿入		
ひ の き 科 (採 種 樹)		ジベレリン 200 ppm	1 樹当り 300~ 400 mℓ	6~8月頃の 花芽分化期	4~5回	葉面散布	5回以内	

★使用上の注意事項

- 「1] 薬液の調製法及び取扱い上の注意
 - ●本剤は次表に従って所定量の水に希釈すれば希望濃度の水溶液を作ることが出来る。

小スティック (ジベレリン 50 mg含有) 1 包当りの水量

	ジベレリン 濃度(ppm)	1 ppm	5 ppm	10 ppm	12.5 ppm	25 ppm	50 ppm	75 ppm	100 ppm	200 ppm	500 ppm	1000 ppm
ı	水量(ℓ)	50 ℓ	10 ℓ	5 ℓ	4 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0. 67 ℓ	0.5ℓ	0. 25 ℓ	0.1ℓ	0. 05 ℓ

大スティック (ジベレリン 200 mg含有) 1 包当りの水量

	ジベレリン 濃度(ppm)	1 ppm	5 ppm	10 ppm	12.5 ppm	25 ppm	50 ppm	75 ppm	100 ppm	200 ppm	500 ppm	1000 ppm
ı	水量(ℓ)	200 ℓ	40 ℓ	20 ℓ	16 ℓ	8 ℓ	4 ℓ	2.67 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0.4 ℓ	0.2 ℓ

- ●薬液は使用の都度調製し、なるべく調製当日に使用する。また調製液はなるべく日陰に置く。
- ●ボルドー液等アルカリ性薬剤との混用はさける。
- ●本剤の使用に当っては使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、 特に初めて使用する場合は病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

「2] 使用上の注意

- ●ぶどう
 - ○ぶどうに関する作物名中の品種による区分は、ジベレリンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分(品種群)に該当するか、病害虫防除所等関係機関に確認してから使用する。
 - ○下記の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場

合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した 上で使用する。

- ○ぶどうの品種による区分
 - 2 倍体米国系品種

「マスカット・ベリーA」「アーリースチューベン (バッファロー)」「旅路(紅塩谷)」

• 2 倍体欧州系品種

「ロザリオ ビアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリサ」「イタリア」 「紫苑」「ルーベルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」

3 倍体品種 「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」「B Kシードレス」

巨峰系4倍体品種

「巨峰」「ピオーネ」「安芸クィーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稔」「高妻」「白峰」 「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」

(「あづましずく」「ふくしずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない)

- ○降雨や、異常乾燥(フェーン現象等による異常乾燥)の心配の無い日を選んで処理する。
- ○処理後の天候急変(降雨、異常乾燥)で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ジベレリンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。
- ○本剤は樹勢の弱い樹や登熟の悪い枝等に対しては、効果が不十分なので使用をさける。 樹勢がやや強めの方が安定した効果が得られるが、極端に樹勢が強い場合はかえって効果が出にくいので樹勢の管理には十分気をつける。栽培管理については、病害虫防除所 等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- ○本剤の使用により、着粒が安定するとともに果粒の肥大が促進されるので、着粒過多(過密着)による裂果発生のおそれがある。また、果梗が硬化し脱粒しやすくなるので、裂果や脱粒を未然に防ぐため、開花前の整房や着粒後の摘粒等の栽培管理を適切に行う。栽培管理については、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- ○使用時期や使用濃度を誤ると、花振い、着粒過多(過密着)、有核果混入等のおそれが あるので、使用時期、使用濃度は厳守する。
- ○無種子化を目的とした着粒前の処理の際は、特に丁寧に処理することを心がけ、薬液が 花蕾全体に十分いきわたるよう注意する。
- ○果粒肥大促進を目的とした着粒後の処理の際は、薬液が付きすぎないように、処理後ぶどうの枝やぶどう棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
- ○本剤をぶどう(2倍体米国系品種)に無種子化・果粒肥大促進の目的で使用する場合、第2回目処理を浸漬で行うときは100pmで処理する。また、第2回目処理を散布で行うときは75~100pm (80~100ℓ/10 a)で処理する。散布で行う場合、散布処理は浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹に対して行い、薬液が果房に十分かかるように注意する。
- ○本剤とストレプトマイシン剤を併用することで無核果率の向上を図ることができる。使用に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。また、ストレプトマイシン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- ○本剤をぶどう(デラウェア)[無核栽培]で使用する場合、満開予定日約14日前よりも早く処理するときは、花振いすることがあるのでホルクロルフェニュロン剤を加用する。また、ホルクロルフェニュロン剤を加用して処理する際は、ホルクロルフェニュロン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- ○本剤をぶどうの果房伸長促進の目的で使用する場合は、必ず花房だけを目がけて花房全体が十分濡れる程度に部分散布する。

この時期に誤って大量の薬液が枝や葉にかかると、その翌年に発芽不良などの新梢の生育障害が起こるおそれがあるので、動力噴霧機やスピードスプレーヤなどによる全面散布は行わない。

- ○ぶどう(あづましずく)に使用する場合、満開4~13日後の1回処理で十分な効果が得られるが、栽培方法や樹勢等によっては満開時と満開4~13日後の2回処理する必要があるので、使用に当っては病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。
- ○ぶどう(巨峰、ルビーロマン、ハニービーナス)[有核栽培]に果粒肥大促進の目的で 使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実 を確認してから処理する。

●かんきつ

〈落果防止〉

- ○本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用する。
- ○果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、 濃度は守る。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

- ○衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した 樹には使用しない。
- ○低温が続いた年(極端な低温の年)または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がける。
- ○散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。
- ○ジベレリンの使用濃度を 2.5 ppm で使用するときは、マシン油乳剤 60~80 倍液に加用する。
- ○マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

●温州みかん

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

- ○ジベレリンの使用濃度を 2.5 ppm で使用するときは、マシン油乳剤 60~80 倍液または 展着剤に加用する。
- ○マシン油乳剤または展着剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤または展着剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

〈浮皮軽減〉

○本剤処理により、着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。

使用濃度の目安

- ・貯蔵用または樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3~5ppm
- ・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1~3.3 ppm
- ○本剤処理により薬斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- ●ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。
 - ○異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がらないことがある。
 - ○通常幼果1果当り小型噴霧器で0.1~0.2ml程度を噴霧する。
- ●長門ユズキチ (無核)

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り

落ちる程度に散布する。

- ●びわ(3倍体)
 - ○本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理する。
 - ○樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2 回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果 実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。
 - ○第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守る。

●びわ (麗月)

- ○麗月では他のびわ品種の花粉により受精し有種子果実となるため、無核果実生産を行う場合は、他の品種の花粉による受精を行わないように、開花前から花房への被袋を行う。
- ○樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2 回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果 実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

●かき

- ○散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、使用時期を誤らない。
- ○本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節する。
- ○散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行う。
- ○品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を 初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及 び薬害を確認した上で使用する。

「富有、早秋、太秋、新秋、甘秋」

- ○「中谷早生」では着色遅延のおそれがあるため、25ppm以下の濃度で使用する。
- ●すもも (貴陽)
 - ○授粉を行ってから、散布する。
 - ○薬液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
 - ○第1回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る 傾向があるので、所定の使用時期に使用する。
 - ○本剤の散布により結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備 摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。
- ●みつば(軟化栽培を除く)

葉の表裏に十分散布する。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に 処理した方がよい。

●みつば(軟化栽培)

灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込み は心持ち加減する。

●トマト

落果防止剤を使用した後の本剤の散布は効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、又は混用して使用する。

●いちご

〈着果数增加·熟期促進〉

- ○処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。
- ○本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決め

る。

又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。

○過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。 〈果柄の伸長促進〉

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け 易いので防寒に留意する。

●セルリー

定植後約1ヶ月以内に散布すると「す」が入りやすくなるので使用をさける。 なお、スポット散布で使用する場合は1株当たりの使用液量が5~10 mlが適量である。

●春うど

芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬する。灌水は処理の当日はさけ、翌日 に行う。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

きふ

収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤らない。

- ●畑わさび
 - ○花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。
 - ○全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理する。 気温が5℃以下では効果が劣るので11月上旬からビニール等で被覆し、保温管理する。 また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理 には十分注意する。
- ●たらのき
 - ○散布は散布むらがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行う。
 - ○薬液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておく。
- ●ばれいしょ
 - ○種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
 - ○浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の 浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
 - ○薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくと発芽遅延等の薬害を生じるので、 風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
 - ○種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
 - ○薬剤処理した種いもは食料又は飼料には使用しない。
 - ○品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防 除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

●花き

- ○処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意する。
- ○処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧する。
- ○てっぽうゆり
 - ・球根の低温処理は8~13℃ 7週間とするが、本剤によって発芽が早まる場合があるので、発芽状態を見ながら発芽が始まれば、7週間が経過していなくとも出庫する。
 - ・本剤処理によって休眠が打破され発芽率が向上するが、発根は抑制される。従って定 植時期が高温の場合は根の発育が悪くなり、その結果切花重量の減少等の障害を受け やすい。この高温障害防止策として次の処理をすることが望ましい。
 - 球根は100g以上の大球を用いる。
 - 定植時よしずや寒冷紗の被覆等によって温度を下げるような管理をする。
 - 生育初期に2~3回尿素等の葉面散布剤の散布を行う。
 - ・従来の温湯処理によって根ダニの発生を同時に抑えていたところでは、本剤の処理に

よっては根ダニの抑制効果はないので、殺ダニ剤等の利用によって発生を防止するよう留意する必要がある。

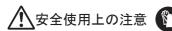
○さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。

- ○りんどう
 - ・処理は葉が十分濡れる程度に散布する。
 - ・使用時期の定植直前は苗姿3~4対葉期を目安にする。
 - ・切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保する。
- ○ソリダゴ
 - ・高温期の処理では効果を示さないので、低温期(11~3月頃)に処理する。
 - ・処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。
- ○さくら(切り枝促成栽培)

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。

- ●すぎ及びひのき科の採種木
 - ○散布量は葉が十分ぬれる程度とし、特にその年に伸びた枝にはていねいに散布する (3 $\sim 4 \text{ m}$ の採種木 1 本当 $9 \text{ 300} \sim 400 \text{ m}$ ℓ程度)。
 - ○6月頃に処理すると雄花が多くなり、8月に処理すると雌花が多くなる傾向があるので、 雄花・雌花の両方をつけるにはすぎでは7月に2~3回、ひのきについては4~5回散 布するのが適当である。
 - ○同一の木に連年処理すると樹勢が衰える場合があるので十分留意し、樹勢が衰えるようであれば隔年処理を行う。
 - ○他剤との混用及び近接散布は効果がおちることがあるので行わない。
 - ○樹高が高く葉面散布が困難な場合は、樹幹基部剥皮挿入法で処理する。処理の時期は7月初め頃が適当である。処理は樹幹基部3ケ所に幅約1~2cmの辺材部に達する傷をつけ、形成層の内側で木部に多少かかるように剥皮し、所定量の本剤粉末を挿入して、剥皮した樹皮でふたをし、ビニールテープ等でしばっておく。なお、使用量は樹の大きさに応じて適宜加減する。
 - ○使用に当っては林業関係技術者の指導を受ける。
- [3] 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任に おいて事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関 の指導を受けることが望ましい。





- ●本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。 眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。 使用後は洗眼する。
- ●使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。
- ●浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。
- ●浸漬後の薬液は、河川等に流さず、水産動植物に影響を与えないよう適切に処理する。
- ●直射日光をさけ、なるべく低温で乾燥した場所に密封して保管する。